

エジプト発掘財団送致品 濱田耕作氏寄贈 1916年



W.M.F.ペトリーから考古学を学んだ
濱田耕作は
帰国後、日本初の考古学研究室教授となった。
彼の中には、後進の教育研究資料として
ロンドンから京都に宛てて、複数回に分けて
エジプト遺跡出土資料が送られた。

ロンドン大学 フリンダース・ペトリ氏寄贈 1922年

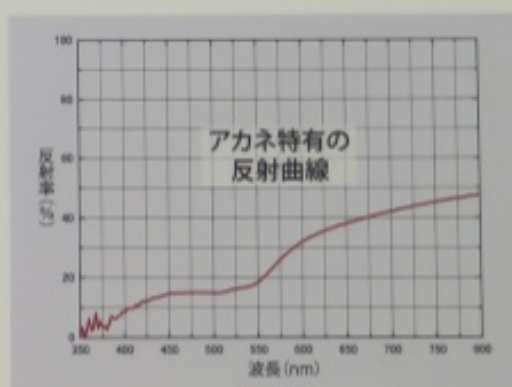
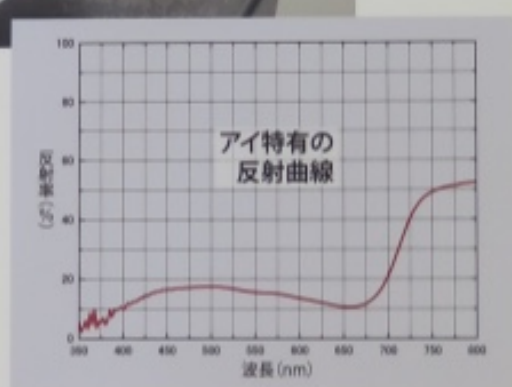
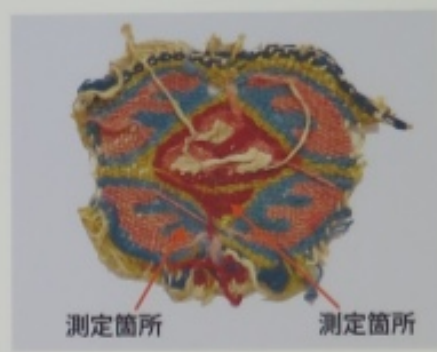


それから約100年を経た現在、
天然繊維からなる資料群を研究対象とし、
素材分析および年代測定を行っている。

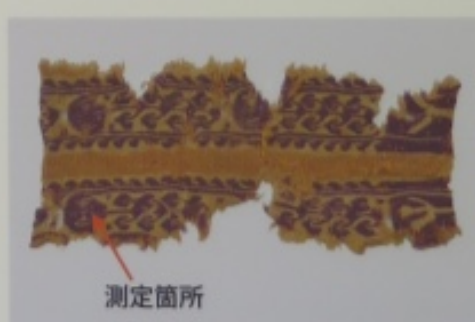
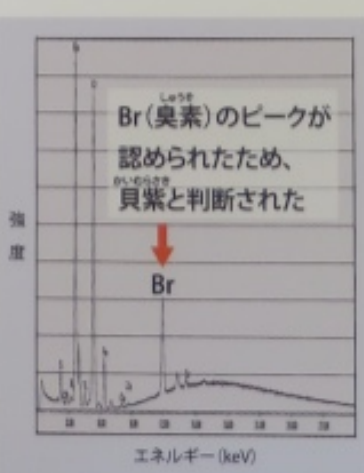
コプト織物の科学分析

コプト織物の鮮やかな色。染料は独自の化学構造をもつので、光の吸収波長も異なる。そのため、色々な波長の光の特徴を利用すれば、文化財に影響を与えずに染料の非破壊調査ができる。ここでは、イメージング分光分析や可視紫外分光分析、三次元蛍光分光分析、蛍光X線分析による染料調査をおこなった。

可視紫外分光分析



蛍光X線分析



調査の結果、赤系統はアカネやラク、青系統はアイ、貝紫などの天然物から固有の色素を抽出し、それぞれの色素の化学反応を利用し、染色に応用していたことが明らかになった。

協力：京都大学生存圏研究所 宮内庁正倉院事務所 京都大学大学院農学研究科森林科学専攻

科学分析で判明した染料の違い

赤色



この赤色は、アカネの根や茎から抽出されたブルプリンなどの成分が発色していると考えられる。日本でも、アカネ染めの色鮮やかな遺品が正倉院宝物に伝えられている。



この赤色は、介殻虫から取り出したラクク酸によると考えられる。日本でも、友禅染などに用いられている。染料のほか、バイオリンの表面コーティング材料としても知られる。

紫色



この紫の色素は、貝紫であると考えられる。貝紫は、帝王紫とも呼ばれ、使用できるのは王や貴族に限られていた。1,000個の巻貝から取り出せる染料はわずか1gだったといわれている。



この紫は、アカネで染めた後、アイで染め重ねたと考えられる。2種の色素を併用する高い染織技術があったことがわかる。

～京都大学総合博物館開館10周年記念企画展“埃及考古” 展示パネルより～

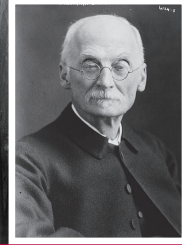
100年の気づき
そして、未来へ

濱田耕作が伝えたかった考古学が
時の流れと文化の領域を現代と対話しながら追及する物質科学であるなら
これからの私たちの課題は 資料劣化との戦い、でもある。
すべての物質は崩壊する。
劣化の道筋をたどらない物質はない。
資料の劣化状況を把握し、保存環境整備に努め、未来につなぐ。

こうして、スーダン・メロエの土器は京都大学にやってきた！



アッシリア学の大家でもある A. H. セイス（右から2人目）は、レイナルド・ウィングート総督の招きで青ナイルや白ナイルの上流まで出かけた。その中にメロエ遺跡も含まれていた。



セイス

濱田耕作

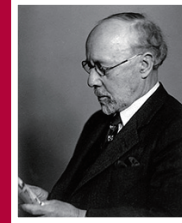


京都を訪れ面会

エジプトの遺物を寄贈

師事

メロエ土器を寄贈



メロエ遺跡の発掘を勧める

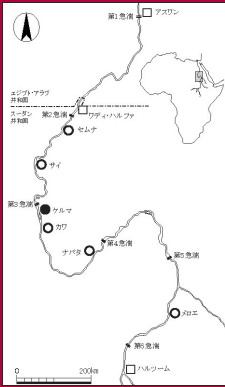
友人関係？



W. M. F. ペトリ

J. ガースタング

メロエのシティサイトを発掘



メロエで、ガースタングの手により発掘が行われ、濱田耕作がロンドンで学んでいたころ、現在のスーダン共和国と南スーダン共和国は、イギリス・エジプトの二元統治下におかれており、事実上、イギリスの植民地となっていた。

現在のエジプトとの国境は、ナイル川第2急湍の少し北に位置しているが、紅海沿岸側のハラীব地区では、両国が所有権を主張する三角地帯が存在する。古代においては、国境が政治的状況により時期によって第2急湍から第4急湍の間で変動していた。

スーダンの歴史文化がエジプトと関連付けられ、時にはその一部であるかのように語られるのは、近代までのこうした歴的背景によるところが大きい。

調査研究もエジプト学者によるものが大半で、技術や文化の伝播が、無意識的に下流から上流という方向付けが行われる傾向にあった。エジプト南部からスーダン北部のナイル川流域は、ヒエログリフで金を示す「ヌブ」から「ヌビア」とよばれるようになったとされ、辺境の地として見なされていたのである。

100年の気づき ～むかし話ぢゃない考古学～

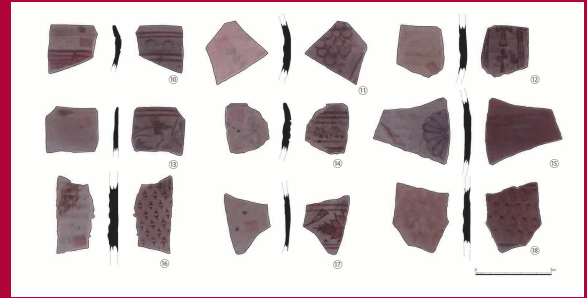


左のラベルは、土器とともに保管されていたものである。「埃及スダン」、「エジプトスーダン」と併記してあるのは、左記の理由によるもので、ラベルを作成した時点では、決して誤りではない。

また、「ガールスタング」は、上写真のガースタングのことである。



①から⑱の土器破片は、土や顔料も類似している。紀元1世紀から4世紀にメロエ遺跡周辺で生産されていた資料と考えられる。土器外面には筆書きやスタンプ、内面には筆書きで、エジプトやローマに起源をもつデザインを施すのが特徴である。



ニュースレターで新たに紹介した土器破片

考古学資料目録にエジプト資料として紹介された土器破片



メロエ遺跡内の様子とルーブル美術館所蔵メロエ土器

京都大学総合博物館の所蔵資料は破片であるが、実際には、左写真のように鉢形・ビーカー形・コップ形に復元できる。

通常この土器は、ピラミッド群のような墓から出土し、通常、人々が住まう場所からの出土は少ない。しかし、ガースタングが発掘を行ったのは居住地で、寄贈された土器もそこから出土したものである可能性が高い。そういった意味でも、この土器資料がもつ価値は高い。



ルーブル美術館学芸員 Amnata Sedho-Autissier 博士
専門はスーダン考古学。左写真は、ニュースレター

メロエ土器は、「エジプト資料」として日本に贈られてきた。

しかし、スーダンの歴史文化を主体として研究を進めた時、それを「エジプト資料」という位置づけだけに留めておくことが難しいことも示している。一つの資料が指し示す歴史は、つねに現代の環境や研究者の視点とも深くかかわる。また、言葉は通じなくても資料を通して共通の理解に到達することもできる。

濱田耕作が伝えたかった考古学は、時の流れと文化の領域を現代と対話しながら追及する物質科学。日本から世界を世界から日本をボーダレスに見つめる「昔話ぢゃない考古学」なのだ！